

コロナ・ショックと BRICS (1) ～「C+BRIS」の構造がより鮮明に～

ここにきて BRICS、特に中国を除く「BRIS」諸国が思わぬ形で再び注目を浴びている。新型コロナウイルス蔓延の中心が欧米先進国から新興国、とりわけ「BRIS」を形成するブラジル(感染者数世界第2位)、インド(同3位)、ロシア(同4位)、南アフリカ(同5位)へ移行しており、8月14日時点で感染者数は4か国合計で700万人超と世界の約1/3を占めるに至っている。世界の約4割に当たる32億人の巨大市場を有し、世界のGDPの約1/4を占める BRICS。コロナ・ショックは果たして市場・経済規模だけの問題なのだろうか。

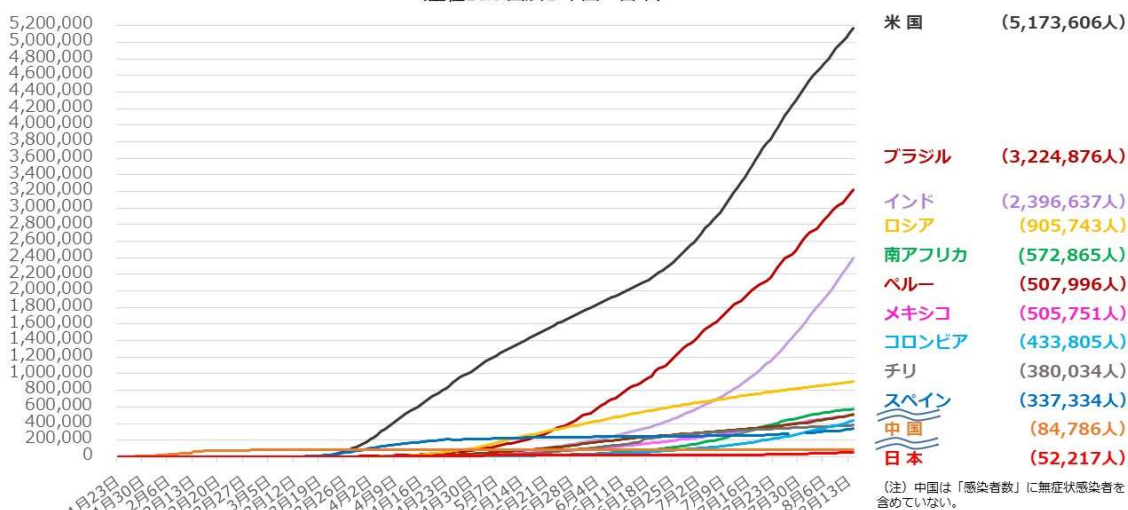
新型コロナウイルス 国別感染者数の推移

8/14 (金) 時点

国別感染者数の推移 (累積)

(上位10か国及び中国・日本)

出典：各国政府発表
(米国は各州発表)



「BRIS」諸国の主な共通点として、貧困格差の一層の拡大や経済推進を優先させがちな大統領の強いリーダーシップが挙げられるが、これらが今回の感染拡大に拍車をかけてしまったことは否めない。貧富の差が大きく、医療体制の脆弱な新興国で感染が広がれば、世界全体での収束は見通せない。これに経済優先の強硬姿勢が加わり、感染拡大の加速が続いている。

感染の第一波が収束した「C」中国は、いち早く経済を回復軌道に乗せようとしている。生産や売り上げに関連する経済指標は、4月以降好転しつつあり、経済成長率は、1～3月に底を打ち、2020年は順調にいけば通年でプラス成長となる見込みである。

「B」ブラジルは、3月末に感染拡大が始まったが、景気拡大を重視する大統領が防疫措置に否定的だったため、感染者数が爆発的に増加し歯止めがかからなくなっている。感染拡大によって需要は大きく落ち込んだままであり、景気の悪化が続きそうである。

「R」ロシアは、3月末に感染者数が急増する兆しが見えたため、約40日間の「非労働

日」を設けて感染拡大防止を図ったが、その影響で4～6月期の経済成長率が大幅に悪化し
そうである。感染拡大の動きは収まらず、7～9月期以降も景気回復は難しそうな情勢だ。

「I」インドは、3月末に感染拡大を受けて全土でロックダウンを実施、初期段階での感
染拡大を抑え込んだ。しかし、5月のロックダウン解除後に感染が拡大する傾向にあり、4
～6月期以降、景気がさらに悪化するの避けられない情勢である。

「S」南アフリカは、3月末に全土でロックダウンを開始し、災害対処法に基づく「国家
的災害事態」を8月15日まで延長することを決定したが、感染拡大の収束はみられず、経
済成長もアフリカで最も低下する見込みである。

コロナ・ショックで世界的に深刻なデフレ傾向が予見される中、「BRIS」諸国では、主に
通貨下落などの要因からインフレ圧力が高まり、さらに苦境に陥ることが予想されている。
インフレ率の高止まりで、個人消費が押し下げられ、また、中央銀行による利下げも難しく
なり、景気回復が遅れるという「BRIS」諸国の伝統的な「ネガティブ・スパイラル」の再
来である。

また、「BRIS」諸国の経済に大きな影響を与える要因として、コロナ・ショックによるコ
モディティ価格の動きも注目に値する。原油をはじめとする資源価格はコロナ・ショック発
生後に軒並み急落しており、「BRIS」の中でも資源輸出への依存度が比較的高いブラジルや
ロシアの経済は大きな打撃を受けている。一方、中国は資源消費国であり、経済への影響は
限定的とみられる。今後、コロナ禍後の資源需要回復過程において、中国とこうした資源輸
出国の利害が相反する局面が出てくることも予想される。

BRICS が注目され始めてから早や 20 年が経過したが、当初想定されていた経済成長を
軸とした世界経済に与える影響力は減速傾向にあった中での今回のコロナ・ショック。これ
まで BRICS の一体感は首脳会議を通じた政治面、特に中国主導による米国への「対抗軸」
への共鳴で何とか維持されてきたが、最近では「BRIS」諸国の共鳴を超えた米中対立が一
層深刻化している状況下、むしろ中国が「BRIS」諸国の経済に与える影響へと注目が移っ
てきている。これに、コロナ・ショックの各国の対応やポスト・コロナの経済への影響を踏
まえると、今後は中国とそれ以外、すなわち「C+BRIS」の構図が一層鮮明化していく様相
を呈している。

このコーナーでは、日本企業・投資家からも依然注目される BRICS、とりわけ「BRIS」
につき、各国のコロナ・ショックによる経済・財政対応を踏まえつつ、今後の経済成長への
課題につき中国との関係を含めて展望してみたい。